



TITLE:

Review of Polarographyのアーカイブ化完了

AUTHOR(S):

垣内, 隆

CITATION:

垣内, 隆. Review of Polarographyのアーカイブ化完了. Review of Polarography 2010, 56(2): 89-90

ISSUE DATE:

2010-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/171886>

RIGHT:

© 2010 日本ポーラログラフ学会

Information

Review of Polarography のアーカイブ化完了

垣内 隆

All issues of *Review of Polarography* archived

Takashi Kakiuchi

科学技術振興機構に申請し、白井理会計理事、相樂隆正編集委員長、前田耕治理事、小山宗孝庶務理事のお世話のもとに進行していた本会会誌 *Review of Polarography* の電子アーカイブ化が基本的には完了した。

http://www.journalarchive.jst.go.jp/japanese/jnltop_ja.php?cdjournal=revpolarography1955

(スペースなく上下行の文字列を繋いだ URL)

にアクセスすることにより、その前身である「ポーラログラフイーの研究」を含めて第1巻(1953年)から、本誌を読むことが出来るようになった。本会のホームページからリンクをたどることも可能で、ぜひ、一度アクセスされることをすすめる。

過去を振り返るのは前向きではない、世界的に進歩を競っている先端科学研究にはなじまない、という声も昨今、耳にする。しかし、自分の現在の立ち位置を明らかにする、あるいは意識するために、現在関わっている学問分野の歴史的な流れを踏まえておくことは、とくに電気分析化学では、また、万事多忙な現代ではいっそう、大事で有用であると最近とくに強く感じる。現在の最先端がこれまでの先人の成果の上に成り立っていることは言うまでもなく、それを前提として、それをわかったものとして、それから新しいこと、未知なるものに挑戦していくのではあるが、それが等閑視されてはいないか。

自戒も含めて書くのであるが、すでに確立された既知のものが時間と共に忘れ去られ、あるいは十分に学び取られ継承されることなく、その結果、土台としているはずの先達の苦闘の成果に対する意識と敬意がいつの間にか怪しくなっているということがしばしば、しかも、そこ此処に、ある。いわば伝言ゲームのように、元あったものが、時間と人の手を経ると共にデフォルメされ、言葉の殻だけが残っていく、といったことであろうか。

競争的環境は、人を磨くあるいは「個性を輝かせる」よりは、こうした学術の劣化を加速するという、その負の側面がますます目立つようになって来ている現在、立ち止まり、振り返り、それからおもむろに歩き出す、ということが、むしろチャレンジングなこととして強調されるべきと思われるのである。

理論を重視するというか、きちんとした合理性をベースとするポーラログラフイー、電気分析化学においては、伝言ゲーム的劣化はとくに深刻な結果をもたらす、あるいは

はもたらししていると強く感じる。何十年も前にすでに明らかにされていることを、「再発見」し、確立された概念や言葉の殻をちりばめて新しいことであるかのように装い、曖昧化して語り、かくして論文を増産する、査読する方も忙しいからかその装いを見抜けない、というのはその例である。ついでながら、インパクトファクター (I.F.) が、雑誌のセールスにおけるブランド力に他ならないことは、知る人ぞ知るのであるが、この I.F. は、こうした右肩上がりの論文数の増加に多くを負っており、その論文増加にはまた、かかる形の論文が少なからず寄与している。

理屈はともかく、一度、アーカイブにアクセスし、50 年前、60 年前の研究者はポーラログラフィーをどう捉えていたか、どのように接し、向き合い、如何にしてそれを理解しようとしてきたか、どのように新しい局面を切り開いて来たのかを見てほしい。たいへん刺激的と感じられるであろう。

謄写版刷りの「ポーラログラフィーの研究」第 1 巻 3 号 (1953 年) には、中国から帰国された志方益三先生が「懐かしい祖国に帰って来た。」から始まる一文を寄せられ、「研究者の皆さんからは 経費難、設備難をきく。永い目で見れば 必らず ペイのする所の研究に 何故に 金を惜しむのだろう。為政者も 研究の重要性を認め之に人材と 金を 注ぎ込んで欲しい。日本で最も豊富であり 且品質の好いのは人的資源だと思う。」など、時局にたいする洞察を述べておられる。その内容は、2010 年の今にたいして書かれたかのように新鮮である。

第 4 巻に連載された「ポーラログラフィーへのラプラス変換の応用 (I) 序説」(神原富民)、「同 (II) 変換の諸性質と Kinetic Current の理論」(高橋玲爾)、「同 (III) 合成関数と Voltammetry における二・三の基本式」(千田 貢) の 3 編のラプラス変換の電気化学への応用に関する解説は、今の学生の勉強会テキストに薦められるものである。

残念なことに、アーカイブはまだ完全ではなく、たとえば、Review of Polarography に掲載された論文の中でおそらく最も有名な、今年の 8 月現在で 325 回引用されている (ページ数や雑誌名を少し違えて引用しているケースを除く) Y. Saito, “A Theoretical Study on the Diffusion Current at the Stationary Electrodes of Circular and Narrow Band Types,” (Vol. 15, 177-187(1968).) は、現在のところ収録されていない。ちなみに、1988 年に Bond, Oldham, Zoski をして “Using essentially the method that we have adopted, Saito derived many of the results of this section almost twenty years ago.” と言わしめた [1] この論文は、出されてから 40 年あまりを経て今なお「現役」で、被引用回数は 2006 年 15 回、2007 年 19 回、2008 年 19 回、2009 年 16 回、今年は 8 月までで 13 回を数える。後ろ向きが新鮮であることを、あるいは新鮮であるためには振り返っておく必要があることを教える良い例であると言えよう。

[参考文献]

1. A. M. Bond, K. D. Oldham, C. G. Zoski, *J. Electroanal. Chem.*, **245** (1988) 71-104.

かきうち・たかし (京大院工 本会会長)